コロナ禍における高等教育の実態

－そのとき学生・教員はどのように感じ、何を期待したか－

沖　　裕　貴

＜要　旨＞

本稿は、主に立命館大学の授業アンケートをはじめとする学生調査や教員調査をもとに、コロナ下の Web 授業に対する学生、教員の意識や期待、また、満足度や課題を明らかにしたものである。ここからは Web 授業が突如始められた 2020 年度当初より学生の Web 授業に対する満足度は高く、2021 年度春学期にはそれがコロナ以前の対面授業を凌駕したことが明らかになった。また、21 年度春学期には、もはや「対面授業」か「Web 授業」かという選択よりは、いずれの授業においても「学習意欲の促進」や「フィードバック」などの『授業の質』を高めることが「到達目標達成度」や「能動的取組度」「総合的満足度」などの『学習充実感』につながることが明白となった。

その意味では今後、「対面授業」でこそこれまで 2 年間培ってきた DX を活用し、インタラクションやフィードバックを心がけながら適切な量の課題を課すことで授業外学習を促し、学生の能動性を高めることが重要となるであろう。

1. はじめに（取組の概要）

立命館大学においては全国の多くの大学と同様、新型コロナウイルス感染症の影響で、2020 年度春学期以降ほぼ 1 年半に渡ってほとんどすべての授業がオンラインでの実施に移行するとともに、学内行事についても中止・延期もしくは同じくオンラインでの実施に追い込まれた。本学ではこの間の学生の学びの様子を把握するとともに、支援のあり方を検討するために教育・学修支援センターの協力の下、授業アンケートをはじめとする

立命館大学教育開発推進機構・教授

様々な調査・分析を実施してきた。

2020 年度春学期の授業アンケートにおいては、教員を対象として同時期に実施した「Web 授業の実施状況に関するアンケート調査（2020 年 8 月 3 日～8 月 24 日）」の回答データと連結して Web 授業の実施形態の類型化を行った。また、同時に 2019 年度春学期（完全対面授業）と 2020 年度春学期（完全 Web 授業）双方に同じキャンパスで同じ科目を持っている教員を抽出して、その授業アンケート項目に関して両年度の比較を試みた。そこからは授業外学習時間を除くすべての授業アンケート項目で 2019 年度よりもポイントが低くなったことが明らかになった。しかし、リアルタイム型、VOD 型（後述、表 1 を参照）においては比較的落ち込みが少なく、またフィードバックをしっかり行う型においても落ち込みが少なかった（立命館大学教育開発推進機構、2021 年 3 月、「ITL ニュース」No.50）。ただし、落ち込みについては学生も教職員もまだ Web 授業に慣れていない時期の調査であり、その後、これらの値は回復していく。

次に 2020 年度秋学期の授業アンケートの回答データが得られた段階で、2019 年度春学期からの 4 期分の授業アンケートの回答データとこれらが対象とした授業の受講生の成績を組み合わせて比較・分析することにより、対面授業と Web 授業における学習効果の比較を試みた。そこからは、GPA（算出方法は後述）に関して 2020 年度春学期、秋学期とも 2019 年度に比して高めに推移していることが分かった。これは定期試験ではなく平常点評価が中心になったことが影響していると思われる。

また、2020 年度秋学期もほぼ全面的に Web 授業で実施せざるを得なかったにも関わらず、講義、小集団科目で「到達目標達成度」や「学び役立ち度」などが 2019 年度のポイントと遜色のないレベルまで回復していることが明らかとなった。さらに、授業内容や課題・小テストの分量は、2020 年度秋学期には、春学期よりも軽減されるとともに、授業外学習時間も若干減少したが、依然、2019 年度よりは高めであることも分かった（立命館大学教育開発推進機構、2021 年 4 月、「2020 年度秋学期に実施された授業の学習効果について」）。

「受講満足度および受講希望実施形態に対する要因分析」（立命館大学教学部教務課、2021 年 4 月、「学びと成長レポート」第 2 特別号）からは、Web 授業に負担を感じながらもしっかりとフィードバックをしてもらえている学生ほど秋学期の授業に満足している様子が明らかとなり、課題や小テストの分量を適切に管理するとともに、十分なフィードバックを行う

ことが学生の満足度につながることが明確となった。

そして、2021 年度春学期の授業アンケートからは、もはや対面授業かWeb 授業かという選択よりは、「学習意欲の促進」や「フィードバック」「学びスタイル適合度」などの『授業の質』をいかに上げるかが、「到達目標達成度」や「能動的学習態度」「総合的満足度」などの『学習充実感』につながるという結果が示された。また、これまで議論になってきた対面授業／Web 授業の有効性の差についても、『学習充実感』や『授業外学習』に与える影響が極めて軽微であることも判明した。つまり対面授業、Web 授業の間に「到達目標達成度」や「総合的満足度」に関して大きな差はないということである。よって今後は Web 授業のみならず対面授業においてもこれまで培ってきた DX を活用し、十分なインタラクションやフィードバックを心がけながら適切な量の課題を課すことで授業外学習を促し、学生の能動性を高めることが『学習充実感』に最も重要だということになる（立命館大学教育開発推進機構、2021 年 12 月、「ITL ニュース」No.53）。

2. Web 授業（オンライン授業）の諸相

2.1　全国と立命館大学の Web 授業の満足度

文部科学省が国会の要請を受け、2021 年 3 月 5 日～27 日に実施した「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」によると、全国で無作為抽出された 3,000 名の学生のうち有効回答数 1,744 名の Web 授業の満足度は、「満足」と「ある程度満足」を併せて 56.9%であった。これに対して「満足していない」と「あまり満足していない」の合計は 20.6%で、満足している学生が過半数を占めることが分かった。

また、同時に問われた「Web 授業の良かった点」では、「自分の選んだ場所で授業を受けられた」が最も多く 79.3%、次いで「自分のペースで学修できた」が 66.1%となり、リアルタイム型や VOD 型の Web 授業の長所がよく表れる結果となっている（文科省、2021 年 3 月）。

立命館大学においても 2020 年度春学期授業アンケートで Web 授業の総合満足度を問うたところ、「満足した」と「ある程度満足した」を併せて 72.0%を占め、「満足しなかった」と「あまり満足しなかった」を併せた 11.6%を大きく上回った（立命館大学教育開発推進機構、2021 年 3 月、「ITL ニ

ュース」No.50、有効回答者数 131,023 名)。学生の Web 授業に対する満足度は、当初から教員側の予想よりも高かったのである。

2.2　類型別に見た Web 授業の総合満足度

表 1　Web 授業の類型（2020 年度春学期）

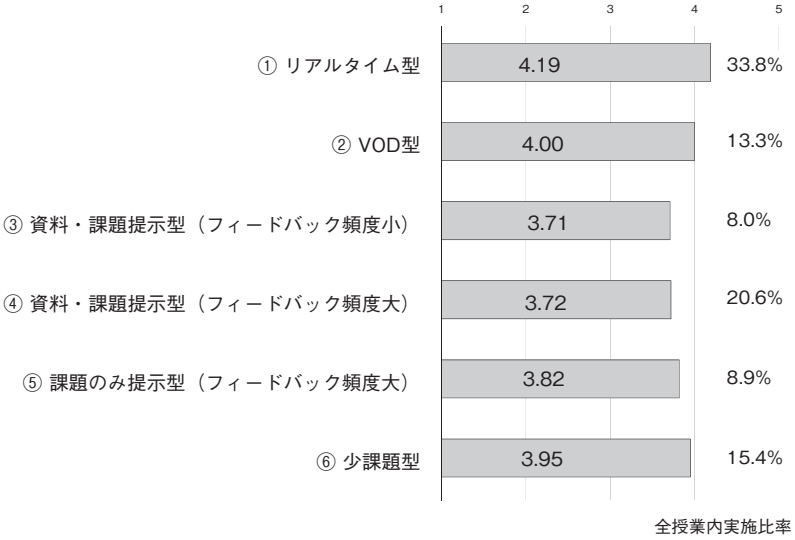
授業のタイプ	説明
① リアルタイム型	Skype や Zoom などの Web 会議システムを使ったライブ配信によってリアルタイムで授業が行われた。
②VOD（ビデオ・オン・デマンド型）	撮影された映像やスライド動画（VOD コンテンツ）を学生がいつでも見られる状態で授業が提供された。
③ 資料・課題提示型（フィードバック頻度少）	レジュメや PDF、スライド等の文献・資料と課題が提示されたが、小テストはあまり課されず、また課題の結果のフィードバックが少なかった。
④ 資料・課題提示型（フィードバック頻度大）	レジュメや PDF、スライド等の文献・資料と課題が提示され、課題や小テストの結果がフィードバックされた。
⑤ 課題のみ提示型（フィードバック頻度大）	VOD コンテンツや文献・資料などはあまり提示されず、主に課題または小テストの提示とそれらのフィードバックによって授業が行われた。
⑥ 少課題型	VOD コンテンツや文献、資料を一部提供することもあるが、他のタイプと比べて課題提示の頻度が少なかった。

出所：筆者作成

立命館大学では、2020 年度春学期の授業アンケート結果と教員に対して担当する授業ごとに実施した「Web 授業の実施状況に関するアンケート調査（2020 年 8 月 3 日～8 月 24 日）」の回答データを連結し、クラスター分析を用いて春学期実施された授業の実施形態を類型化した（表 1）。また、その類型化に基づいた Web 授業の総合満足度（図 1）を 5 段階（1：満足しなかった ～ 5：満足した）で算出した（立命館大学教学部教学課、2020

年 10 月、「学びと成長レポート」特別号)。

表 1 で少し説明が必要なものは ③ ～ ⑥ であろう。「③ 資料・課題提示型（フィードバック頻度少)」と「④ 資料・課程提示型（フィードバック頻度大)」との違いは小テストや課題のフィードバックの頻度の大小であるが、「⑤ 課題のみ提示型（フィードバック頻度大)」は教科書を用いた授業に多く、LMS に文献・資料等はあまり載せず、課題や小テストを課してそのフィードバックを行った授業である。また、「⑥ 少課題型」は文献・資料も課題提示も少なく、学生にとっては「楽勝」授業と映っていた可能性が高い。



出所：筆者作成

図 1　Web 授業の類型別の総合満足度（2020 年度春学期）

図 1 の右側に添えられたパーセンテージは、その型の全授業内の実施比率である。「① リアルタイム型」が最も多く 33.8%、ついで「④ 資料・課題提示型（フィードバック頻度大）」が 20.6%、「⑥ 少課題型」が 15.4%、「② VOD 型」が 13.3%であった。類型別に総合満足度を見ると、「① リアルタイム型」（5 段階中 4.19）「② VOD 型」（4.00）が最も高く、楽勝科目である「⑥ 少課題型」を除いてフィードバックの頻度大のもの（「④ 資料・課題提示型（フィードバック頻度大）」「⑤ 課題のみ提示型（フィードバック頻度大）」）は比較的満足度が高く出ている。

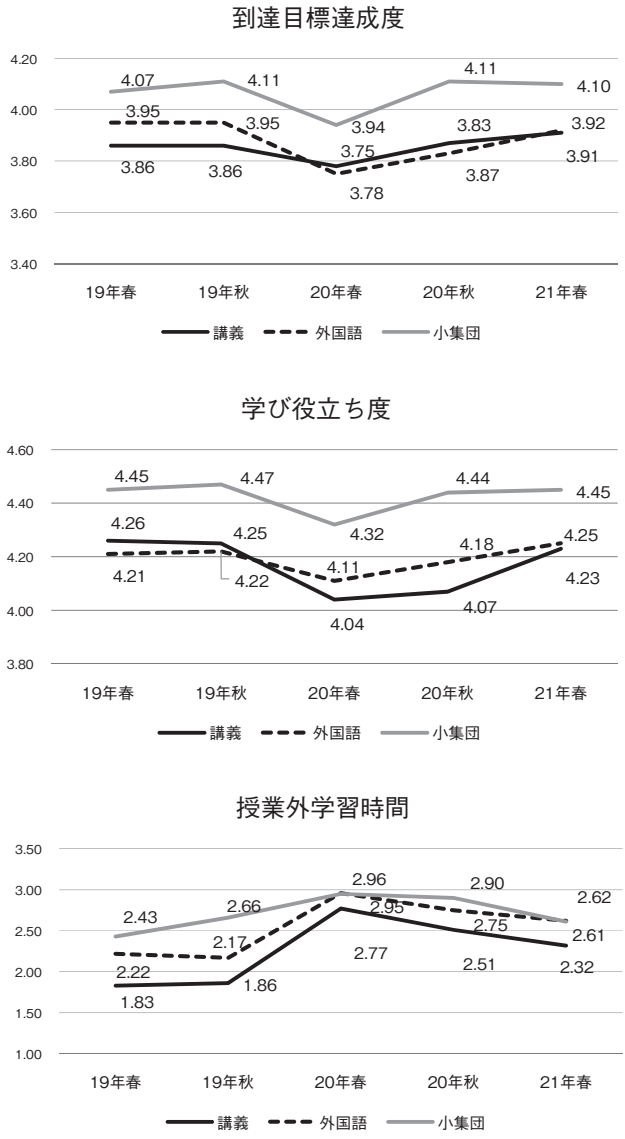
このことから、満足度に関しては Web 授業の長所を活かしたリアルタイム型や VOD 型が比較的高いポイントを得るとともに、フィードバックの重要性が認識されることとなった。

しかし、2019 年度と 2020 年度の春学期の授業アンケートの項目を比較すると、同一の教員が両年度、同じ科目を同じキャンパスで担当しているという条件で厳密に見た場合、授業外学修時間を除いてすべての項目で 2020 年度の方が下回っていることが分かった。少なくとも Web 授業が始まった 2020 年度春学期時点では、総合満足度に相当する「学びの役立ち度」や「到達目標達成度」を含めて、Web 授業は対面授業のレベルに到達していなかったと言える。

2.3　授業アンケート項目の経年比較

立命館大学における 2019 年度春秋学期、2020 年度春秋学期、2021 年春学期の授業アンケート結果のうち、「到達目標達成度」、総合的な満足度に相当する「学び役立ち度」、「授業外学習時間」を講義、外国語、小集団科目に分けて表示したのが図 2 である（立命館大学教育開発推進機構、2021 年 12 月、「ITL ニュース」No.53）。

ここからは「授業外学習時間」を除いて 2020 年春学期が底であり、2021 年度には対面授業が行われていた 2019 年度と同じかそれを上回るポイントになっていることが分かる。ただし、授業外学習時間については Web 授業が始まった 20 年春に急増したが、その後、教員に対して課題等を適切な量にするような要請を行ったり、受講生に対して通常の授業時間である 90 分を超える時間を授業外学習時間として回答するよう指示をしたりした結果、若干減少傾向にあるが、それでも 2019 年度の水準を上回っている。



出所：筆者作成

図２　授業アンケート項目の経年比較

2.4　Web 授業の問題点

2.4.1　Web 授業に対する負担感

立命館大学における 2020 年度春学期の授業アンケートからは、Web 授業に対する負担感が「適度であった」と答えた者が 21%いる反面、「やや重かった」「重かった」と答えた者が合計 67%に上るなど、当初は受講生にとってかなり負担感が重かったようだ。しかし、過度な課題等を差し控えるよう教員に要請した結果、2020 年 11 月に実施した「2020 年度秋学期『学生の受講状況に関するアンケート調査』では「適度であった」が 39%、「やや重かった」「重かった」が合計 47%と春学期よりは減少した（立命館大学教学部教務課、2021 年 4 月、「学びと成長レポート」第 2 特別号）。しかしながら、この負担感は履修登録科目数には影響せず、依然、2021 年度春学期の履修登録科目数は 2019 年度と変わらず、単位制度の実質化が進んだとは言えない。

2.4.2　「授業負担感」、「GPA」、「1 回生の特徴」

文科省調査（2021 年 3 月）でも、Web 授業の悪かった点に関して「レポート等の課題が多かった」（49.7%）は「友人などと一緒に授業を受けられず、寂しい」（53.0%）に次いで多かった。また、「身体的疲労を感じた」（44.0%）、「質問等、相互のやりとりの機会がない・少ない」（43.9%）なども Web 授業の負担になっていることが分かった。

立命館大学で 2020 年度、学生の学習成果を表す客観指標である GPA（A+：4 点、A：3 点、B：2 点、C：1 点、F：0 点で計算した平均値）について調べたところ、2019 年度と比べて「講義系科目」で 13%～15%、「外国語科目」「小集団」では 4%～8%高くなっていた。その理由については、Web 授業の出席率が高いことや、定期試験ではなく課題や小レポート、小テストなどの平常点評価が中心となったことなどが考えられる（立命館大学教育開発推進機構、2021 年 4 月、「2020 年度秋学期に実施された授業の学習効果について」）。

1 回生の特徴に関して言えば、2020 年度春学期の授業アンケート項目で 1 回生と上回生との間に大きな回答の差はなく、1 回生に特異な回答傾向は見られなかった。特に総合的満足度はどの学年も 3.86～3.97 であり、2 回生＜1 回生＝3 回生＜4 回生であった（立命館大学教育開発推進機構、2020 年 10 月、「2020 年度春学期末『教員アンケート』および『授業アンケート』の分析結果について」）。ただし、2021 年 7 月に発表された「学びと成長調

査」によると、2021 年度の 2 回生（2020 年度の 1 回生）は「正課での学びと成長に満足しているか」と「課外での学びと成長に満足しているか」の項目において、例年の 2 回生より「正課での学びと成長」で 8.3%～11.4%、「課外での学びと成長」で 14.1%～16.7%、「満足している」と回答した学生の比率が下回っていた（立命館大学教学部教務課、2021 年 7 月、「2021 年度学びと成長調査」の結果概要について）。それに加えて 2021 年度春学期の授業アンケート結果からも、現 2 回生（昨年の 1 回生）の「到達目標達成度」や「学び役立ち度」の値が他の学年より 0.05～0.10 ポイント低いことが確認された（立命館大学教育開発推進機構、2021 年 12 月、「ITL ニュース」No.53）。やはり 2020 年度の 1 回生は、ほぼ 1 年間 Web 授業のみを受講し、キャンパスへの入構を制限されたことから、学びや成長、役立ち度に関しても何らかのダメージを受けている可能性が高いと言えよう。

2.4.3　「アルバイト」、「友人関係」、「休学・退学」等

文科省調査（2021 年 3 月）では、2021 年 1 月～2 月（緊急事態宣言発令中）のアルバイト収入が、前年 10 月～12 月（未発令時）より大きく減少した（「収入がなくなった」＋「50%未満になった」）学生は 20.6%、「50%～90%程度になった」学生が 29.1%いた。また、アルバイト収入が減少した理由は 71.7%が「勤務先の時短営業等の影響」であったと報告している。

さらに同調査では、学内の友人関係に関する悩みを抱える学生は 29.1%で、その理由は「友人と思うように交流できない」（48.2%）、「友人が思うように作れない」（29.9%）、「友人と交流できるが、サークル活動や旅行等に行くことができない」（15.9%）などであった。特に学部 1 回生でその比率（46.3%）が高い。

また、朝日新聞・河合塾共同調査（2021 年 9 月 27 日、朝日新聞朝刊、n=655）によると、全国国公私立大学の学長の 73%が「課題活動の実施」、61%が「学生の孤立化・友人関係の希薄化」、50%が「新入生の大学生活・学修への導入」をコロナ下での大きな課題と考えていると回答している。

文科省調査（2021 年 3 月）では、2021 年 3 月時点で退学を考えている学生の割合は 1.2%であったが、2020 年度中（1 年間） に実際に退学した学生数の全体に占める割合（実績）は 1.95%であり、2019 年度中の割合（実績）が 2.50%であったことも踏まえると退学者が急増しているわけではないとする。また、休学については 3.2%で 1 年間の実績よりも上回っているが、これは休学理由として今後、海外留学を考えているとの自由記述が多

く見られたことによるものと考えられるという。なお、立命館大学でも2020年度、退学・休学数の増加は見られなかった。

コロナ禍にもかかわらず、全国の大学・短大で 2020 年度に中退・休学した学生数が、前年度から約2万1千人減り、約12万5千人（文科省調べ）だったのは、給付型奨学金（2020年創設）の制度設立や、各大学が授業料減免などの支援に力を入れたからだと考えられている（2021年10月27日、朝日新聞朝刊）。立命館大学においても、2020 年度、オンライン受講環境整備費補助として全学生に一律3万円を支給、情報環境支援として PC とルーターを春秋延べ687セット無償貸与、家計・アルバイト状況急変緊急支援に3,796名に対し9万円給付等を実施した。

ただし、全国的に見るとコロナによる退学数の把握は朝日新聞が調査し、回答を寄せた大学の3割止まりであり、「経済的困窮」や「就職起業等」に分類された学生の中に、コロナの影響を受けたケースが含まれている可能性もあるという（朝日新聞・河合塾共同調査、2021年10月19日、朝日新聞朝刊）。

2.5　授業におけるフィードバックの重要性

2020年度秋学期開始時点で、大学としては課題に対する質問や講評等について学生とのコミュニケーションをはかるよう教員に対して要請してきた。2020年11月に実施された「学生の受講状況に関するアンケート調査」においては、「ほぼ全ての Web 授業」または「大半の Web 授業」で適切なフィードバックが行われたと回答した学生は 45% を占め、2020年度秋学期の多くの授業で適切なフィードバックが行われていたことになる。

ただし、「ごく一部」や「皆無」とした回答も 2 割弱あり、学生アンケートの自由記述においても、適切なフィードバックが行われていない Web 授業への不満が見受けられた。

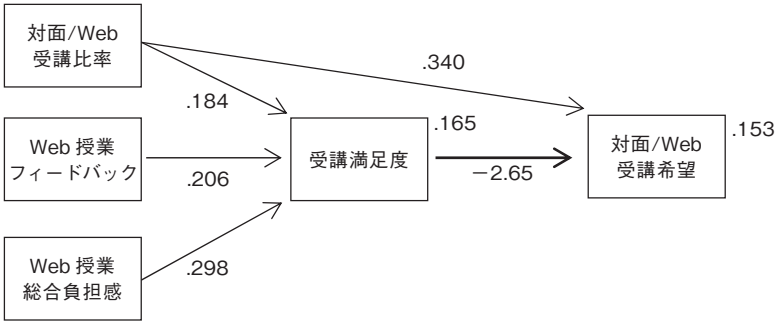
一方、2021年度春学期末の授業アンケートでは、授業におけるフィードバックはさらに徹底され、学生からフィードバックが十分に行われていないと指摘された授業は全体の 9%にまで減少した（立命館大学教学部教務課、2021年4月、「学びと成長レポート」第2特別号）。

2.6　受講満足度および受講希望実施形態に対する要因分析

2020年11月に実施した「学生の受講状況に関するアンケート調査」をもとに共分散構造分析を行ったところ、図3の通り、対面授業をより多く

受講し（β=.184）、Web 授業に負担を感じながらも（β=.298）しっかりとフィードバックをしてもらえている（β=.206）学生ほど、秋学期の授業に満足している（R^2=.165）。ここでも Web 授業の負担感が指摘されているが、それよりも重要なことは十分なフィードバックを行うことにより満足度が上がることが示されたことであろう。

また、対面授業をより多く受講している（β=.340）が、現状に不満を持っている（β=-.265）学生ほど、今後さらに対面授業を増やしてほしいと望んでいる（R^2=.153）ことも分かった（立命館大学教学部教務課、2021 年 4 月、「学びと成長レポート」第 2 特別号）。



出所：筆者作成

注：*GFI*=.988　*CFI*= .923　*RMSEA*=.077

図 3　受講満足度および受講希望実施形態に対する要因分析

2.7　学生と教員が希望する対面／Web 授業比率

学生が希望する授業形態の比率については、2020 年 11 月に実施した「学生の受講状況に関するアンケート調査」（n=4,035、全学生の 13%）で分析した。「講義」「外国語」と「演習・実習・実験」の回答について大きな違いが見られた。「ほぼすべて Web 授業」（Web 授業が 80%以上）を望む学生は「講義」で 43%、「外国語」で 47%と半数近くに上った一方で、「演習等」は 24%にとどまった。「ほぼ全て対面授業」（対面授業が 80%以上）を望む学生は、「講義」が 14%、「外国語」18%で低い一方、「演習等」で 42%と半数近くになった。また、「半分程度は対面（40%以上）」で見ても、「講

義」が 42%、「外国語」が 39%、「演習等」が 68%と大きな違いがあった。希望する授業形態は、「講義」「外国語」と「演習・実習・実験」で Web と対面が逆転しているようである（立命館大学教学部教務課、2021 年 4 月、「学びと成長レポート」第 2 特別号）。

対面授業を支持する学生の意見としては、前述の文科省調査と被るところが多いが、「友人ができない」、「下宅や下宿で一人授業を受け、課題を提出する生活はメリハリがなく、肉体的、精神的に苦しい」、「学習のモチベーションを維持できない」、「大学生活の授業以外のメリットを享受できない」などが挙げられ、Web 授業を支持する意見としては「通学時間が長いため、感染が心配」、「自分や家族に既往症があり、感染が心配」、「Web、特に VOD の方が何度も見直しができ、質問をしやすい」、「自分でタイムマネジメントができ、空いた時間を有効活用できる」、「個人の適性から対面は苦手」などが挙げられていた。

また、「教育効果に基づいて Web 授業か対面授業かを分けてほしい」や「対面で行っても教員が一方的に講義するだけならば Web（VOD）でやってほしい」など、対面と Web を選択制にしてほしいという意見や、「自習室の Wi-Fi 環境の不備」や「対面と Web 授業が連続することによる準備時間の不足」など、対面、Web の混合授業に対する不満なども多数書き込まれていた。

一方、2021 年 1 月 25 日～2 月 5 日に実施した教員に対する「2020 年度秋学期 Web 授業支援に関するアンケート調査」（n=2,312、全教員の 46%）によると、「講義」と「外国語」の「最適な対面授業と Web 授業の比率」は、「15 回全て対面」と答えた教員が 30% となり、「全授業回数のうち 6 回以上対面」であることが望ましいと答えた教員は 21%であった。他方で、「15 回全て Web 授業」も 21% となり、「対面は 4 回以下でもよい」とする教員も 9%いた。かろうじて過半数（51%）の教員が対面授業をより望んでいる結果となったが、コロナ下での回答とはいえ、教員においても希望する対面／Web 授業の比率は割れていると言えるだろう（立命館大学教学部教務課、2021 年 4 月、「学びと成長レポート」第 2 特別号）。

2.8　授業アンケート項目に関する要因分析

2021 年度春学期の授業アンケートの項目に対して主成分分析を行った。アンケート項目が 12 個と多いことから、それらに対して質問内容が授業に対する評価か、学習者本人に対する評価かによって、8 つの授業指標（Q1・

Q3・Q6・Q7・Q8・Q9・Q10・Q11）と 4 つの学習指標（Q2・Q4・Q5・Q12）に分類して主成分分析を行った。

授業指標については 3 つの主成分が抽出された（表 2）。第 1 主成分は『授業の質』で、Q1（シラバス遵守度）・Q3（学習意欲の促進）・Q6（学び役立ち度）・Q9（学びスタイル適合度）・Q11（フィードバック）が正の負荷を示した。第 2 主成分は『対面性』で、Q7（対面／Web 授業比率）が正の、Q8（Web 授業活用方法）と Q10（内容、課題・小テスト分量）が負の負荷を示した。第 3 主成分は『授業の量』で、Q7 と Q10 が正の負荷を示した。Q7 と Q10 は第 2 主成分と第 3 主成分に負荷していたが、Q10 の正負が逆転している。

学習指標については 2 つの主成分が抽出された（表 3）。第 1 主成分は『学習充実感』で、Q4（能動的学習態度）・Q5（到達目標達成度）・Q12（総合的満足度）が正の負荷を示した。第 2 主成分は『授業外学習』で、Q2（授業外学習時間）のみが正の負荷を示した（立命館大学教育開発推進機構、2021 年 12 月、「ITL ニュース」No.53）。

表２　授業アンケート項目に関する要因分析（授業指標）

項目		主成分 1	主成分 2	主成分 3
		授業の質	対面性	授業の量
Q6	学び役立ち度	.826	.088	.005
Q3	学習意欲の促進	.808	.073	.059
Q11	フィードバック	.722	−.036	.044
Q1	シラバス遵守度	.709	−.032	−.034
Q9	学びスタイル適合度	.652	−.104	−.055
Q8	Web 授業活用方法	.184	−.691	.167
Q7	対面／Web 授業比率	.090	.637	.623
Q10	内容、課題・小テスト分量	−.143	−.382	.764

出所：筆者作成

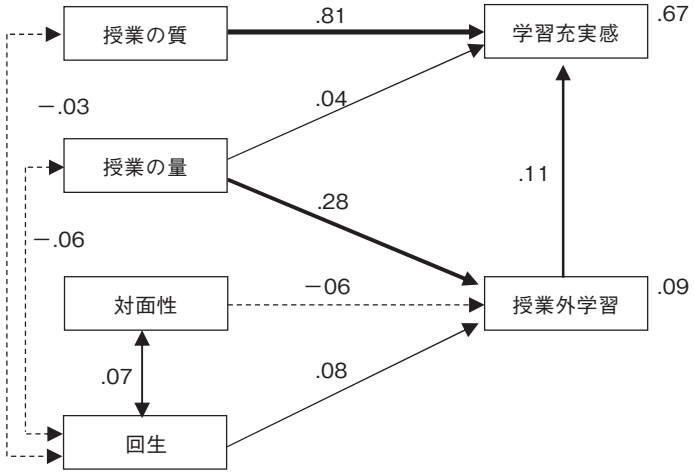
注：Q7：7（対面 100%）＞ … ＞ 1（Web100%）
Q8：4（Zoom 等）＞ VOD ＞ 資料・課題 ＞ Web なし
Q10：5（多かった）＞ … ＞ 1（少なかった）
他はすべて 5 段階評定尺度で、5（肯定的）＞ … ＞ 1（否定的）

表３　授業アンケート項目に関する要因分析（学習指標）

項目		主成分１	主成分２
		学習充実感	授業外学習
Q5	到達目標達成度	.842	－.065
Q4	能動的学習態度	.837	.056
Q12	総合的満足度	.792	－.264
Q2	授業外学習時間	.226	.961

出所：筆者作成

注：Q2：5.000（180 分以上）＞…＞3.125（90 分以上 120 分以内）＞…＞0.625（しなかった）
Q4：5（取り組んだ）＞…＞1（取り組まなかった）
Q5：5（達成できた）＞…＞1（達成できなかった）
Q12：5（そう思う）＞…＞1（そう思わない）



出所：筆者作成

注：*GFI*=.991　*CFI*= .977　*RMSEA*=.069

図４　授業アンケート項目に関する要因分析（構造方程式モデリング）

授業アンケートの 12 項目を要約した 5 つの主成分得点と学生の回生数を用い、授業指標と回生が学習指標に及ぼす影響について構造方程式モデリングで検証した（図 4）。『学習充実感』は『授業の質』（.81）、から圧倒的な影響を受け、『授業の量』（.04）、そして『授業外学習』（.11）からも若干の正の影響を受けていた。また、『授業外学習』は『授業の量』（.28）と「回生」（.08）から正の影響を『対面性』（–.06）から負の影響を受けていた。

ここで注目すべきは、『対面性』で表される授業が対面か Web か、またその混合の割合は、『学習充実感』と『授業外学習』に軽微な影響しか与えていないということである。すなわちもはや対面授業か Web 授業のいずれが有効かという議論は終わったと考えるべきである。

なお、『授業の質』、『授業の量』、『対面性』は独立した主成分変数であるため無相関であることを付言しておく。

3. まとめ

2021 年度春学期の授業アンケートからは、もはや対面授業か Web 授業かという選択よりは、いずれの授業においても「学習意欲の促進」や「フィードバック」「学びスタイル適合度」などの『授業の質』をいかに上げるかが、「到達目標達成度」や「能動的取組度」「総合的満足度」などの『学習充実感』につながるという結果が示された。

また、これまで議論になってきた授業の対面／Web あるいは VOD／リアルタイムの有効性の差については、『学習充実感』や『授業外学習』に与える影響が極めて軽微であることも判明した。つまり対面授業、Web 授業の間に「到達目標達成度」や「総合的満足度」に関して差はなく、またその間の分布の比率にも大きな差はないということである。

よって今後は Web 授業のみならず対面授業においてもこれまで培ってきた DX を活用し、十分なインタラクションやフィードバックを心がけながら適切な量の課題を課すことで授業外学習を促し、学生の能動性を高めることが授業の成否に最も重要だということである。本来は Web 授業が対面授業と遜色のないことを言いたかったが、もはや対面授業が Web 授業よりもいいことを示さなければならない時代となったと言えよう。

学生は、Web 授業に「適応」した。まるでネットショッピングに慣れた若者がリアルの買い物に躊躇するように、Web 授業に慣れた若者が対面授

業に戸惑う。これまで以上に「質」を重視し、対面ならではのインタラクティブな授業が作れなければ、彼らの不満は爆発するかもしれない。逆説的だが、それにはこの1年半蓄積してきた教育DXのさらなる活用が避けられないであろう。

参考文献

朝日新聞、2021、「学生の孤立に危機感」『朝日新聞』2021年9月27日。

朝日新聞・河合塾、2021、「コロナで休退学 つかみきれぬ実態」『朝日新聞』10月19日。

朝日新聞、2021、「仕送り望めず中退を選択」『朝日新聞』2021年10月27日。

文部科学省、2021、「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」。

立命館大学教育開発推進機構、2020、「2020年度春学期末『教員アンケート』および『授業アンケート』の分析結果について」。

立命館大学教学部教学課、2020、「学びと成長レポート」特別号。

立命館大学教育開発推進機構、2021、「ITLニュース」No.50。

立命館大学教育開発推進機構、2021、「2020年度秋学期に実施された授業の学習効果について」。

立命館大学教学部教務課、2021、「学びと成長レポート」第2特別号。

立命館大学教学部教務課、2021、「2021年度『学びと成長調査』の結果概要について」。

立命館大学教育開発推進機構、2021、「ITLニュース」No.53。